

『般若心経』は最も有名なお経といって良いでしょう。ほとんどの伝統仏教の宗派でお唱えしますので、一度は耳にされたことがあるのではないのでしょうか。

『般若心経』は、大乘仏教の『般若経』に含まれる短いお経で、曹洞宗で用いられているものは、西遊記の三蔵法師で有名な玄奘げんじょうさんぞう三蔵が訳した二百六十六文字のものです。

正式には『摩訶般若波羅蜜多心経』まかはんにやはらみたしんぎょうといい、「摩訶」は大きい、偉大な、優れたということ。「般若」は仏の智慧。「波羅蜜多」は、迷いの此の岸からさとり彼岸へ渡ること。また修行が完成しさとりの状態にあること。「心」は、要の、真髓の意味です。つまり「大いなる、仏の智慧さとりの真髓を説いたお経」といった意味になります。

「色即是空、空即是色」という有名な一節にもあるように、『般若心経』のテーマは「空」くうです。「空」という言葉は、中身が無くふくれあがったものを意味する言葉からきており、そこから姿の変わらないものが無いということを表します。つまり自分を含む全てのものや現象などは、さまざまな縁が繋がり支え合って、しばし成り立っているという事を示しています。このことを「縁起」といいます。

慈悲の菩薩である観音さまが「世の中を自在に観る」という「観自在菩薩」かんじざいぼさつという名前で登場します。そして、世の中の全ての存在はさまざまな縁によって成り立っていて「空」で

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

あるということを観て取り、お釈迦さまの十大弟子で智慧第一といわれた舍利弗^{しやりほつ}に教えを説くのです。繋がり支え合っているという真実を仏の智慧によって知るからこそ、慈悲の心がおきるのです。

終わりの部分の・・・「羯諦 羯諦。波羅 羯諦。波羅僧 羯諦。菩提薩婆訶^{ぎやーていぎやーてい はーらーぎやーてい はらそうぎやーてい ほーじーそわか}」

は慈悲の心を良く表していると言えるでしょう。この部分は、インドの古い言葉を意味を訳さずに音に漢字を当てはめて伝えられました。それだけ重要な言葉だということです。この部分はさまざまな解釈ができますが、仏教の精神から訳すならば・・・

「行こう行こう、彼岸へ行こう、彼岸へみんなで行こう、さとりよ、幸あれ」となります。

自分一人だけがさとの彼岸に渡ろうとするのではなく「みんなで行こう」という行いの大切さを伝えてくれているのではないのでしょうか。

— 終 —